

解き放されたむらのエネルギー

—— 三里塚 七一年前後

波多野 克彦

# 解き放されたむらのエネルギー

——三里塚 七一年前後

波多野克彦

空港に反対する三里塚と芝山農民の戦いは、今もなお執拗につづけられています。七八年の二期工事分の開港以来、騒音が現実のものとなり、成田市や芝山町の住民の中にも二期工事の着工に対する不安の声が地をほうようにひろがりつつあります。昨八月に行われた反対同盟の二期工事着工に反対する署名活動に、芝山町の七〇％以上の町民が賛意を示しました。今日、明日をもって空港を廃絶することはできなくとも、息ながく戦いをつづけていくことが必要だと、同盟は署名活動の結果をみて考えています。二期工事を含む空港の完成は、想像以上の地域に実害をもたらすことが、今まで反対運動にかかわってこなかった住民にもひしひしと感じとられているようです。今後、運動がそれらの地域の人々と何らかのつながりをもってすすめられていく可能性もあると思います。そのようなことが現実のものとなってくれば、当然、運動の広さと質も変わってくるでしょう。

なんといっても、今までは農地をとられる敷地内の人々と、それに隣接する騒音地域の人々によって反対同盟は構成されてきました。そこから離れた地域の人々といえ、三里塚闘争の途方もない前進に、ただ無関心をきめこむだけでした。それが一昨年の成田市議選、昨年の芝山町議選と、同盟の予想をこえる反応が住民のなかからあらわれ、芝山町議選においては、保守側が立候補予定者を一人ひっこめ無投票にもちこみ、選挙戦を避けるという奇妙な状況が

発生しています。開港という事態は、同盟に重圧を与えていると同時に、このような周辺地域の人々に空港に無関心ではいられなくなる現状を多少とも強めています。

さて、このような三里塚の現実の中で、反対闘争のもつ意義を考えていくのはなかなか難しい仕事であり、当然、限界がつきまとうものと思います。今後の戦いの展開によって、私たちの想像しえない視点が発見されるかもしれないからです。そのうえ、三里塚の戦いは、非常に長期にわたるものであり、現地農民だけの戦いではなく、日本全国の労働者・学生・市民等の共通の戦いとなっております。このような壮大な戦いを、個人的作業によって解明しようとすることは、本来不可能な仕事とすら思われます。

ただ私は、三里塚の戦いの幾分かを同伴しえたものとして、この戦いから感知できたものだけでも、報告する義務があると考えました。ここにつらねる事柄は、私の体験したなかから、ピックアップした七一年の代執行にいたる経緯ということにいたします。七一年という年は、二度にわたる代執行のあった年であり、三里塚闘争の歴史のなかでも頂点に位置するはれやかさをもっています。私の考えでは、六九年八月頃から、代執行をへて、七二年の十月頃に行われるまでを、同盟の一つの流れとしてとらえることができるように思います。少なくともその時期は、同盟がみずからの戦いを創出し、

展開しえた時期といえます。そのような戦いのうねりを支えたものとして、いわゆる部落共同体と闘争の論理の密月ともよべる現象があったと私は思います。古くから存在していた最小集落単位としての部落は、それぞれ反対同盟を名のっておりませんが、各部落は網の目のようにつながる人間関係や、組・結・講などの村内組織を生かして代執行に臨んでいきました。

三里塚闘争に参加して感じるあの暖かみと哄笑は、積みかさねられた部落の重みが、解き放された生命力となって噴き出したような感じをうけます。裏話や噂話が絶えたというわけではありませんが、巨大な国家権力を前にして、部落の人々は、そのような要素を逆手にとって敵と対峙するエネルギーとした瞬間もたびたびありました。代執行の時に農民放送塔に掲げられた「日本農民の名において収用を拒む」という少々気負ったスローガンが、何よりも三里塚農民の自信と誇りを示しているでしょう。

### 三

もちろん、同盟が、このようなスローガンを提起できるまでには、それ相應の苦難の道がありました。そしてまた、部落共同体と闘争の論理の密月時代は、その後少しづつ乖離現象を示しているように私には思えます。といっても、三里塚の戦いが農民の戦いを軸とするものである以上、部落共同体の問題は最後まで、その視座を他に譲り切ることはないでしょうし、現在は、代執行当時とは違う形で部落共同体との接点を新たに探り出さねばならぬ時期が到来しているかと思えます。私は、代執行期につづく鉄塔建設から、鉄塔撤去、開港阻止決戦へと連なる、かなり長い時期を次の流れとしてとらえられるような気がしています。その時期を、あらわすスローガンとしては、やはり、「我、敢然として開港を阻む」とい

### 四

六九年八月十八日、御料牧場の閉場式が行われようとしていました。牧場の閉鎖ということは、ひきつづく立木伐採・ボーリング測量・ブルドーザによる整地という形で、空港建設の工事開始の合図としてありました。

同盟は第二公園に抗議のため結集していましたが具体的戦術はなかったと思います。青行隊は先頭に立ちスクラムを組んで閉場式の会場に向かいましたが、準備中の会場に紅白のたれ幕がめぐらされ、掃き清められた土の上にスチール製の椅子が幾脚もおかれていられるどかな光景をみるやいなや、わき目もふらず突入し、式場を目茶苦茶に破壊してしまいました。ほんの数分の破壊劇のあと、ふりかえった青年たちの眼には、会場入り口でスクラムを組み、岩のように動かない親同盟の姿が眼に映ります。先頭に立って突込んだ青行隊は、当然、親同盟も行動をともにしていると思っただけです。

九月八日には、早朝の暗闇のなかで青行隊が逮捕されてゆきました。九月十日に組まれていた同盟の集会は、全員鎌をもって結集しましたが、当初予定されていた敷地内一周デモは、大巾に縮小され、わずかに団結街道の往復にとどまりました。残された青行隊が強く要請した立木伐採阻止闘争は、うやむやのうちに省略されてしまいます。

九月二十八日、青年行動隊は全国集会の席上で次のような闘争宣言を読みあげます。

「三里塚闘争に責任を持つことを基本的に確認していたわれわれは、この闘争の全戦線のすべての状況に、重要な責任があったはずである。しかし、それはわれわれの内部においていつのまにか忘れさられていた。ただ、しゃにむに実力闘争を叫んだ。そうして

うことになると思います。一期工事区域に同盟の土地はすでになく、岩山地区にそびえる大鉄塔と、あらゆる手段を尽くしても開港を阻もうとする同盟の執念が、この時期を貫ぬいています。同盟は、広く全国の住民運動と交わり、参院選も含め外に向かつてひろがっていきますが、それと並行して、部落共同体と闘争の論理の乖離現象が密かに進行していったような気がしてなりません。一期工事の騒音直下に位置する岩山・台宿部落で、熱意ある反対同盟であった十三戸の農家が、その「団結」を最後まで崩さず、集団移転してしまっただけは、乖離現象の一つの象徴といってもいいでしょう。

開港後、このような現実に対する新たな取り組みが行われていることは確かです。それは新しく農家の中心的担い手として登場してきた青年たちの集まりである青年行動隊の手によって精力的に行われています。

六九年以前では、六七年の暮に行われた同盟の日本共産党排除の決定から、三派系全学連の導入に至る過程が重要な時期を形成しているかと思えます。「魔の三ヶ月」と同盟が呼ぶこの時期は、同盟の闘争における指導権の確立期としてとらえることができるかと思えます。共産党の排除と入れ替るように、三里塚闘争に、三派系全学連が登場し、六八年二、三月の成田市役所公団分室攻撃闘争によって、いわゆる実力闘争が切り開かれます。もっとも、この成田闘争では、同盟は組織的に棒をもちたり、石を投げることはまだ決定しておらず、むしろ、学生たちが去ってから行われた三ヶ月（四月～七月）に及ぶ条件派査定測量阻止闘争で、同盟は実力闘争というものを身をもって培ってきたかといえるかと思えます。青年行動隊は「武装」というテーマで毎夜のごとく討論を重ね、同盟の先進的部分として自らを位置づけつつありました。

ることによって、すべての問題が解決されるかのように思っていた。閉場式粉砕闘争は、全同盟の大衆的闘争を見ずして終った。その後われわれは三里塚闘争をになうことの責任について真剣に話し合った。真に三里塚闘争に責任をもつことの重い意味がわかりかけた時、われわれの同志は不当に逮捕されていた。突出したわれわれは、今、再び反対同盟の内側奥深く帰らねばならない。……」

実際、奥深く潜行してしまっただけで、青行隊は、着々と進む工事に対するあせりはあつたでしょうが、闘争を見通しをもって先導していく決意は固まっていなかったようです。彼らは、木ノ根にあった青行隊の団結小屋にたてこもり、連日連夜のように討論をしていました。その討論は、後に「懐死する風景」という傑作となって登場しますが、その本の目次をみるだけでも、彼らが何を論じていたかがわかります。「オレたちの自己史・家・部落……」と分けられた項目からも、彼らが今までの戦いを、家や部落の重い歴史の中にかいぐららせて再検討している姿がうかがえます。

情況は重苦しく、工事の進行を阻止する手だてはありませんでした。それでも十一月十二日には、整地中のブルドーザーの前に、同盟が結集して、作業をとめる行動をおこします。しかし、警察の強硬策で、戸村委員長をふくむ十三名もが逮捕され、工事阻止闘争は万事休すということになってしまいました。同盟は、工事を阻む行動を密かに放棄してしまふのです。

工事阻止闘争の断念とひきかえに、同盟は七〇年の測量阻止、七一年の代執行闘争へとつながる素晴らしい展開を開始します。事業認定が告示される十二月十六日の直前、同盟は一期工事内に残る同盟用地のすべてに、「反対同盟用地」と書かれた大看板を打ちたてます。おそらく、この儀式にも似た行動が、それ以降の同盟の方向を

性格づけることになったと思います。自分たちの土地を拠点として敵を迎え撃つという方向で、当初掲げられた「農地死守」というスローガンに生命力をふきこんでゆくのです。広大な地域で、工事阻止のため転戦するより、農民の感性としては、残された狭い土地であっても、そこにたてこもるといふ発想の方が、より豊かな創造性を導びさせたのだと思います。

青行隊が同盟の内側深く帰って、いる時、中郷部落の親父さんたちが突如行動を開始しました。六九年の暮も押しつまる頃、親父たちは、御料牧場の伐採によって倒された立木を拝借して、天浪団結小屋の周辺にバリケードを築きはじめたのです。混迷していた同盟の中に、このバリケード構築は閃光のような力を与えました。先手をとられた青行隊も直ちに中郷部落と行動をともし、年が明け一月十三日には、全同盟の行動として、立入測量の予測される三団結小屋に強固なバリケードを現出させます。

中郷部落が先端をきる中で、辺田部落はじっくりと組織固めを行なっていました。七〇年の一月末から二月にかけて、何回も辺田は部落集会を開きました。部落内に住む一軒の農家がある政党に属しており、ことごとく反対同盟の方針を批判していることが問題になっていました。同盟からの連絡も「過激な学生と行動をともしない方がいい」といっては、故意に連絡を止めたりしている行為に、部落の役員は「これでは部落運営ができない」といって、何らかの対応策をとることを部落の人々に求めました。人と人のつながりという意味での、部落共同体の機能が果せなくなっていたのです。その結果、辺田部落ではその一軒の農家とは、すべての関係を部落として断ち切ることを決定しました。共同して農作業をやる「結」の関係を切ることを、葬式や婚礼の時にも一切協力しないこと、部落の母ちゃんたちの集りである「子安講」に入れないこと、お婆さん

盟休校をふくむ部落総ぐるみ闘争として位置づけられ、かつてない同盟の昂揚をみたのでした。バリケードにたてこもる農民の顔は喜々としており、さらにそれは百姓らしい戦いの模範という方向性をもたせてきておりました。

押しあげる部落反対同盟の力と、青年行動隊の協力によって、七〇年四月二十八日には、反対同盟総会が開かれました。この集会を同盟の自立の確認として考えていいと私は思います。

「4・28 反対同盟総会にあたって」  
「権力者の策動は『道路を作ってやりましょう』『国の発展はあなた方の発展ですよ』『子供の為に防音校舎をつくりましょう』『それは悪いことですよ』といったような、いろいろの形となって、あらゆる場所に、あらゆる時に、その支配を貫徹せんと、みえない力をもって我々に迫ってくる。そして空港に反対するぞと決意した私たち一人一人の純粋な意識を、しらすしらすのうちに、そめ、私達の行動をにぶらせる。：：：任んでいる社会が、さびの社会だから、つねにとぎすませておかないと、しらすしらすのうちに空港粉砕という意識や行動が、さびについて使えなくなってしまうおそれがあるから。：：：」

資材輸送のための道路舗装や、防音校舎建設の動きなど、この頃には、空港工事の影響は、同盟各部落の内部にも入りこみ問題化していました。こうした問題を各部落ごとに報告しあい、部落ごとに対応していた方法を統一化するためこの集会はもたれました。目に見える空港建設工事が、新しい秩序として、地域に溶けこもうとしている時、相互に緊張感を再生しつつ、事態にたちむかうべきだという、同盟員一人一人の声が、この集会を開催させたといえます。道路舗装の焦点となっていた中郷部落は声明書で、「我々は、空港建設はもとより、それにとまらぬあらゆる関連事業に反対であり、

たちの集りである「念仏講」に入れないよう各自が家のお婆さんに説得すること、子供たちにも一緒に遊ばないよう話すこと、道であつても挨拶しないこと――。

静寂に進められていくこのような取り決めに、列席していた学生の人達は、声もなく押し黙っていました。おそらく、私を含め、戦後教育を受けてきた若者には、想像できない事態が眼前で進行していたのです。立入り測量を前にして、辺田部落の人々は否応なく、部落意識を喚起され、これ以降、同盟休校の子供たちも含め、部落根こそぎ動員で戦いに参加していきます。

前年の夏以来、同盟の内部に潜行していた青行隊は、つみ重ねられた討論をへて、このころには自信をもって再登場してきます。一月十五日に、三里塚で全国集会を開いてくれとの全国全共闘の申入れを、あいまいに受けてしまった幹部会への批判として、「青年戦線七号」は次のようにいいます。「1・15集会に代表してみられるように、反対同盟の闘うこと一切を、学生、あるいは、その他の支援という人々にまかせ、反対同盟自ら闘いを組むことを怠り、闘う決意あるいは闘う方向性のないまま、集会や闘争に参加して、何々派は人数が多い、誰々は来なかった、などという問題に集約してしまい、当然のことのように他の組織によりかかり、他の人にまかせて生きてゆく、このようなことを今後一切断ち切って、我々自身が運動を作らねばならない。：：：我々の闘いは、我々が築き上げねばならない。他に誰がやるというのだ。：：：農民自身の戦いを創出せねばならない。政党や党派のいうことでなく、何百年とつづく部落の歴史や、家の関係、自らの出自について語りあつてきた青行隊は、そのなかに潜むエネルギーを戦いに呼びおこす決意にもえていました。

このような過程をへて戦われた第一次強制測量阻止の戦いは、同盟の時期に行われた同盟の実行役員会で、柳川茂さんは次のようなことをいってました。「たしかに道路を良くしたいという気持はわかる。オレだって耕耘機にのつてると、なんてひどい道だ、何とかなんないものかっつても思う。しかし、今、オレたちは空港を追っばらうためにたたかっているんだ。空港を追っばらうたら、皆なで力をだしあつていい道路をこしらえようじゃないか。それまでは、みんな我慢をしようじゃないか。」上昇期にあつた同盟にとつて、道路舗装などの関連事業などを阻むには、この柳川さんの「我慢の思想」で十分でした。国を相手の大喧嘩のさいちゅうに、「我慢」をしていくことは、同盟の一人一人の農民には、むしろ、抑制のきいた矜持のようにすら感じられていたように思います。

この集会で、青年行動隊は、青行団結小屋の地下に地下要塞をつくることを発表します。「：：：そして、われわれはここに提起したい。われわれが当初から守ってきた「農地死守」は、今まさに、敵権力に対する陳情、あるいは要求的な叫びとしてではなく、はっきりとわれわれの側からのたたかひの雄叫びとして、農地「へ土」を武器としてたたかうことを。「農地死守」を自らの執念と結び、血をかよわせた時、己れの決意と執念と思想が、農地「へ土」と一体となつた時、それはまさに権力に対するわれわれの武器として、強力な闘いがそこに生れるものと信ずる。」

「決意の執念城」とよばれる地下要塞建設宣言から、代執行の全同盟の規模の地下壕戦への視界が開かれたといつていいでしょう。同盟のこのような緊張は、やがて三日戦争から代執行へと昇りつ

めていきます。三日戦争の前に、「三里塚からへ9・30―10・5」強制測量を前にして」という文章を書いた、三ノ宮文男君は「あの静かな桜並木の三里塚も、土は掘りおこされ、砂塵・泥・機械の激音・油と廃家の死臭ただよう三里塚になりつつあります。そんな中で、私達、反対同盟の土地だけが、今もじっと、生きつづけています。」と書き出し、最後に、「これに対して、私達反対同盟は、決意を固め、空港建設という権力の全面的な攻撃に対して、真向うから闘う組織と人をつくりださなければならぬと思います。空港闘争はまさにこれからです。あらゆる地域で闘っているみなさん、がんばって下さい。私達は断固闘います。」と文章を結びました。たまたま、そばに居た私が、「全国から結集して下さいとは入れないの？」ときいたところ、三ノ宮君は、照れたように笑いながら、「そんなこと恥ずかしくて言えぬえ、全国の人だってその地域で一生懸命やっつてんだし、同盟もやっつと自力で戦えるようになってきたんだから、本当に自力でやっつたほうがいいんだよな。それができたら、全国の人たちにも呼びかけることはできると思うんだよな」と言っていました。

実際、三日戦争はほとんど同盟員を中心として戦われました。木ノ根部落を守った、辺田・宿・木ノ根の部隊では、公団・測量班や機動隊とまず接触するのは、畑の測量の時だとして、支援にきた部隊をすべて宅地防衛にまわしました。前線は反対同盟で戦う、もし万が一畑の測量がやられてしまったら、同盟員も宅地を守りに退却する、その際は、同盟も力及ばずとして支援の人々もともに戦ってほしい。このような形で同盟は、畑の角々に小隊を作っつて守りにつきました。混乱の中で、実に素早く小隊を形成したのですが、それは江戸時代につくられたといわれる五人組制度の継承として、部落内に今もある「組」という単位を、そのまま戦いの部隊にかえておこなったのです。「一組はどここの畑、二組はどここの畑：。」号令が

みを象徴していたといえるでしょう。収用地点の穴とバリケードは同盟が守ることになりました。今度は外周を支援の人たちに守ってもらおうという基本的な戦術が決められたのです。部落がそのまま皆の中に引越しをした姿で、戦いは展開されました。

代執行闘争の過程は、さまざまの報告がありますのでここでは省略します。ただ戦いのはじまる直前、一人の婦人行動隊のお母あが、「勝ちたいねえ。なんとかして勝ちたいねえ」と眼をキラキラさせながら語りかけてきたことを思い出します。

しかし、三里塚の芸術は、大型ブルドーザーやユンボによって無惨にも破壊されてしまいました。

部落共同体と闘争の論理の密月、私が仮りにそう名づけた三里塚農民の上昇は、第一次代執行以降、微妙な変化をおびてくるように思えます。

七月には、農民放送塔と第二砦の仮処分阻止闘争が行われます。第一次代執行の収用対象にならなかった第二砦には、地下壕が顕在でした。当初からその穴の一つを受けもっていた青行隊は、代執行直後から連日連夜にわたり穴を強化していました。穴を山側に向けて奥深く掘っつていけば、敵が大型機械で掘っつてこようとも、穴の奥までたどりつくには、山を半分けづらなければならぬはずだ。その間に外周の部隊が、ゲリラ戦をもって機動隊を打ち破れば、穴にこもる同志と感激の対面をすることができる。こう考えた青行隊は、この作戦を彼らの少年時代の夢からとって、「月光作戦」と名づけました。正義の味方月光仮面が、機動隊をけちらし、穴の中で戦う同志を救いにくる。穴は二〇〇メートル近く掘られ、内部の要所には、竹槍・発煙筒・プロパンガスをボンベを利用した火焰放射機などがおかれていました。

一方、代執行の時に掘られた、辺田や宿・木ノ根部落の穴はその

かけられると、親父もお母あも、前々から決つていたように見事にスクラムを組んでかけだしていったのです。糞尿弾・落し穴・竹槍・弓、様々な創意・工夫がこの戦いで現われたのは周知のことでもあります。

同盟みずからの力で戦つた三日戦争を終えて、青年行動隊は、はじめて研修旅行という名のもとに班を分けて、全国の住民運動団体を巡ります。地域の特殊性をかかえながらたたかっている住民の経験と戦い方を学びに行ったのです。逆に、三里塚はようやく自分たちの戦いを、自信をもって報告できるまでに至つたということです。十二月には、そのお礼もかねて、三里塚に全国から住民運動団体を招き、交流会を開催します。「全国の住民の交流の場として、今後とも三里塚を利用して下さい。三里塚は、よろこんで、その場の確保と、できるかぎりの人材を提供するつもりです。」集会は、このように結ばれました。

## 五

七一年は、故小川明治副委員長長の提唱により、年明け早々から、収用予定地の地下壕掘りがはじめられました。各部落は、ローテーションをつくり、鍬・スコップ・まんのうなどの農具を用い、すべて手作業によって穴を掘りあげました。穴は土とともに生きてきた百姓の慧智の結晶ともいえます。地盤の強弱を適確に判断しながら掘りすすめられ、時に水が出たりすれば、田の暗渠排水のやり方を応用して、巧みに水は外へ導き出されます。農作業の延長のように穴掘りは行われ、六ヶ所の収用予定地点には、各部落の性格に応じた穴が出来上りました。百姓の知恵と部落の歴史は、三里塚の大地に一大芸術作品を創出しました。農民放送塔の上にひるがえつた黒棒のついた日章旗が、三里塚農民の創造と、国家に対する深い怨

まま放置されてきました。親同盟はこの時、青行隊のように穴を強化することはしませんでした。もう一回穴にかけようとする青行隊と、なかば穴を放棄した親同盟のちがいがはつきりとあったのです。戦いは開始され、またたく間にバリケードは破られ、同盟は善戦こそしましたが、予想どおり、奥深くほられた穴にこもる青行隊と支援の人たちの孤立した戦いになりました。同盟は、近くの駒井野団結小屋のそばの原に集まり、じつと戦況を見守る以外手はありませんでした。まわりのほうに幾筋も煙がたちのぼります。青行隊の月光部隊が活動を開始しました。夕闇が訪れて、敵のブルドーザーが、穴の上の台地の土を轟音をあげてけずりはじめた時、同盟の内部にいいしれぬ不安が襲いはじめました。素掘りで掘られた穴の上を、ブルドーザーが何台もかけまわっているのは、落盤事故がおきても不思議はないはずでした。穴にこもつた青行隊は、柳川秀夫君、三ノ宮文男君、石毛博道君の三名ですが、辺田の三ノ宮君のお母あは、原の真中に一人うずくまるように坐っつておりました。やがて、そのまわりを辺田の婦人行動隊が一人二人とよりそうように坐り、ついに丸い円陣のようになりました。それは、必死になって、不安を共有しているようにもみえ、なにか見えないほのおがそこをとりまいてるようで近づきたい光景でした。

穴は二日たつても落ちませんでした。そして、青行隊は、同盟の近くまで月光部隊をもつてきていました。その時、何人かの親父たちの姿が忽然ときえてしまったのです。いろいろさがしてみたのですがみつかりませんので、部落のほうに戻つてみました。すると一軒の農家に十人近い親父たちが集まっつており、火焰ビンをつくつていたので、「ガキらがあそこまでやっつてんだまっつては見てらんねえ」と一人の親父はいいました。やがてトラックにビンがつまれ、親父たちは出かけますが、その時一人の親父が「学生みてえに覆面

ぐらしいねえと恰好つかねえでえか」といったので、一人の親父がタオルで顔をおおったのですが、どういうわけか、鼻の下に結び目をつくったのです。いわゆるねずみ小僧スタイルをしたので、私はふきだしてしまいました。ほかの親父も同じ結び目を平然としたので、黙ってついていったものです。この中年武装部隊は、行動の直前に、レポからの「穴が落ちた」という報告で行動をとりやめませんが、この部隊の出現に、若い月光部隊は手をたたいて喜んだという事です。

穴の中で孤立して戦う仲間となんとかして合流したいという青行隊の強い意志が、親同盟の心の中に入りこみ、ついに火をつけたとわかっていいでしょう。この中年ねずみ小僧の部隊と、若い月光部隊の心のきづなこそ、第二次代執行での東峰十字路戦を背後で支えた部落の抱擁力の萌芽でありました。

しかし、青行隊は自ら築きあげてきた思想と戦略に、行き詰まりを感じていたのは事実だと思えます。八月に開催された「三里塚幻野祭」は、ジャズやロックグループを招請しての一大ページェントでありましたが、主催した青行隊の思わくには、なんらかの「発想の転換」を願う気持があったように思えます。

第三次代執行においては、青行隊も穴を放棄します。彼らは、そのすべてを外周部隊に賭けてゆくののです。駒井野団結小屋の地下に掘られた巨大な地下要塞は、今までの地下壕戦の教訓からコンクリート要塞として作られますが、内部の秘密を守るため、選定された人員による工事という形をとりました。第一次代執行時のように農民が喜々として穴掘りを楽しむ姿は、もうみられませんでした。大木よねさんの戦いも含めた第二次代執行の経緯は、たくさんの報告があると思えますので省略させていただきます。

青行隊の流れをとってみると、第一次代執行の、皆と穴中心の戦

いから、七月仮処分の穴と外周の両面作戦、そして第二次代執行の穴の放棄と外周一本槍の戦いと、その変化をたどることができると思えます。そこからみれば、親同盟にとって、部落的次元での穴は第一次代執行において終了していったといっても過言ではないように思えます。

工事阻止を叫び、御料牧場を転戦することをあきらめてから、同盟は、自らの土地に固執して豊かな戦いを生み出してきました。そしてその背後には、部落反対同盟の強い結束がありました。しかし、土を見つめる中から生まれた穴の戦術の有効性をめぐって部落共同体と闘争の論理の間には微妙な乖離が生じてきたといえます。

十月一日、辺田部落の青年行動隊員、三ノ宮文男君は、「空港をこの地にもってきたものを憎む……」という言葉を残し、部落の産土神で自らの生命を断ちました。こんもりと繁った森の中で、彼が最後の生の場を定めたのは、重なりあう木の葉がわずかに開け、そこから部落の家並みが見おろせるただ一つの空間でありました。青行隊のリーダー格である島寛征君は、「……俺たちが身をけずるようにして、毎晩話し合い、きづきあげてきた戦いの結果が……：：：こういうことは……：：：」と、うめくように言いました。彼は、会葬御礼の文章のなかで三ノ宮文男君に語りかけ、「……君のこい望んでいた野辺の楽園を、かならずや実現させてみせましょう。」と、復讐の誓いをあらたにするのです。

二ヶ月後の十二月八日から、十ヶ月におよぶ青年行動隊への大弾圧が開始されます。若者の居なくなってしまった部落で、親父さんやお母さんは、それこそ渾心の力をもって、連れさられた青行隊をおもい、救援活動を行います。連日のように鳴りつづけるドラム籟の音のなかから、次の時期を象徴する大鉄塔が、岩山の地にそびえたてていきます。鉄塔は、空港に反対しつづける百姓の執念をあ

らわしていましたが、同時に、一人の農民が「空に延びていくものってえのは、地下に穴をほっていくのとちがって、百姓には、なんかしつくりこねえ感じがすんなあ」とつぶやいていた声を背負っていくさだめにあったようにも思えます。七二年十月、三ヶ月におよぶ拘留から解かれた青行隊は、再び土に帰っていききました。弾圧の重い状況の中から、その雄姿を現わした鉄塔が次の時期を背負うこととなります。

(三里塚在住)

※『季節』6号より抜刷

季節6(特大号) 近刊 予価一、八〇〇円

〈特集〉現代史における二つの安保闘争の意義  
この安保のスターリニズム的・国家的・機械的改変を批判し、二つの安保をマルクスマールに思想的エッセンスを抽出した諸問題を、六七年安保戦争とアトランティック戦争、破防法、労働者戦争、マルクス研究と広松理論、七二年三里塚沖縄戦争まで全面的に総括を試みる。豊富な資料を駆使し、幻の文献問題を含む。

エスエル出版会 西宮市小松南三、四一八、四〇一

書店にない場合は振替(神戸) 五九、七、二二座名・季節編集委員

発売元・鹿皆社

